

『夫殺し』—多様な読みの可能性

李昂・著 藤井省三・訳

宝島社1993年6月

藤重典子

この翻訳が出たことを喜び、藤井氏の労苦に感謝したい。女性中国研究者のはしくれとして、翻訳はおろか紹介さえもしなかったことにいささかの羞恥もこめて。遅ればせながら、若干のコメントができれば、と思う次第である。オーソドックスな「読み」と作品の歴史的背景については、巻末の藤井氏のを参照されたい。私が目にした日本の論評は大岡玲氏のものの上野千鶴子氏のものである。大岡氏は、作品の暗い衝撃力に関心を持ちながらも、やりきれない思いをしたようであった。上野氏は日本の近代主義者で最良の質を持つ一人であろうが、作者との対談でタジタジという印象を受けた（『宝島』30）。おそらく、私（たち）がこの作品を読んで身体では「わかる」が、理知や理論で表現しきれないところに中国研究の一つの新しい仕事の「場」があるように思う。その間に接近するのは不可能かもしれないが。

まず、主人公の林市であるが、彼女は被抑圧者の悲惨な境遇、というこれまでの文学作品のタイプとは異質な、一種の「おぞましさ」を感じさせる存在である。本人は主観的にはあくまで無邪気である。しかし、寡婦である母親を無意識のうちに殺したのは彼女である。林市の叔父は、母子の住まいを奪い、路頭に追いやった張本人であるが、彼女は叔父の手を借り、叔父の母への迫害に加担して完成してしまうのである。裁かれるその行為の時、母は赤い花嫁衣装を来て、飯を頬張りながら兵士に身をまかせていたが、顔には強い快楽が表れていた。つまりこれは母の再婚であり、母の奇怪なむさぼり食いは、一種の擬態であり道徳的罪悪感を消すための手段であった。とらえられた母のぶざまな姿と羞恥、そして「飢えに迫られて」、という言い訳は林市の心に刻み込まれた。

その後の林市は自分の行為の報いを受ける。母の死の真の原因が飢えではなく、性欲に関係あることに彼女は気づいているから、結婚後は性交に言いようのない恐怖を抱く。それは母のたどった運命と自らの罪を意識下に置くための精神的装置なのである。言葉にならない言葉を彼女は叫びで表現し、それはまた夢となって表れる。そして母が死の間際まで肯定した「食べること」は脅迫観念になり、

死の影をまわりつかせたままで彼女にとりつくのである。

また、夫の陳江水であるが、彼は階級的怒りと、仏教の救済に見放された者としての怒りを持つ屠殺業者である。彼のそのはけ口を屠殺業に伴う殺害の感覚と、セックスの時に女性がわめきたてることに見いだしている。屠殺は実際は洗練された職業技能であり、女性の狂態は芝居でもかまわないのであるが、その二つで攻撃欲が吸収されないとやっていけない人間なのである。もう一つ彼は仏教を心から追い出そうとしながら、それにとらわれ続け、不安になった時にひどい暴力をふるう。

そして彼と妻との闘いは、一面では男性の暴力と支配に対する女性の生き残りの闘いであるが、もう一つ意味があるように思われる。それは、林市を取り込もうとする儒教道徳・彼女の中に根強く残る士大夫道徳と、それを拒否しようとする階級社会の脱落者の論理との闘いである。ゆえに何パーセントかは測れないが、彼は犠牲者でもあるのだ。そして彼がよく口ずさむ歌「娘の手を引き寝屋へと向かう 人の噂を恐れぢやならぬ」などは、世俗倫理に引き込まれていく妻を引き戻そうとする試みでもあったと思われる。

さて、『夫殺し』で大きなウェイトを占めるのは寡婦問題である。中国では寡婦の運命はこの作品に扱われているように、三つあるようだ。つまり、子どものいない寡婦は亡父の親族に売られ、女兒のいる寡婦は追い出されて売春婦となり、男児のいる寡婦は家にとどまり貧困の中で子どもを育てる、というものである。

そして前二者は悲惨な運命という点では問題はむしろわかりやすいが、男児のいる寡婦は家長の思想と嫁の思想を兼ね持つ複雑怪奇な存在になる。それがみごとに描かれているのが阿岡官であろう。

阿岡官は女性の不幸と弱点を見抜く天才であり、そのおしゃべりで他人が隠しておきたい私生活を衆目にさらし、秩序の中に再統合してやる。また阿岡官は他人の性生活を特に監視している。それは嫉妬や快楽のためばかりではなく、嫁が暴露したように、道を踏み外した自分へのコンプレックスから、他人もそうであるという慰めが欲しいのであろう。一方自分の快楽は知られていないと思うから、他人には禁欲を説くこともできるのである。それは自分が被って来た苦悩を他人に押しつけるという形の復讐であるが、女性としての苦悩であるがゆえに、阿岡官の抑圧するのは女性ばかりである。つまり男性による女性支配の先兵となるのがこの寡婦なのである。阿岡官は新たな可能性をもっていた林市夫婦に因果応報のイデオロギーを注入し、二人を内側から解体した。

しかし、林市の夫殺害は避けられなかったのであろうか。林市は阿岡官の家での盗みぎきによって、エディプスのように、母親の殺害者は自分であることを知らされる。また賭博も、性交の時の叫び声が笑いものにされていることも知る。

それらは薄々と感じていたことであつたが、同時に一つに意味が組み合わされ、彼女をぼうぜんとさせる。

彼女は自分が予期していたような自殺はしなかつた。矜持とでも言える態度で闘い抜いたのである。まず最初に、性交の時に決して声をたてないことにした。歯を食いしばり、唇が破れて血を流しても声を立てない妻に夫は根負けし、大ぶりの肉を持ち帰るのである。これは買収か懇願か脅迫か読み取れないほどの、「食」にかかわる自分の存在の顕示である。そしてその夫に林市は今度はばくちをやめるように言う。彼は激しく怒り、それからも暴力的なセックスは続いていく。彼女は緊張と絶望で病気になった。そして回復してから彼女はアヒルの雛を飼う。それは飛べない鳥であり、地面をはい、餌をついばむという点で彼女自身の投影でもあり、彼女の子どもでもあり、同時に家計の補助になどという点で、二人の未来でもあつた。彼女の出せた最後の希望のカードである。しかし陳江水は酔いまぎれにヒナをめつた切りにしてしまう。それは本質上の母子殺害であり、彼には同じ意味を持った過去の記憶——出産前の母豚の屠殺——がよみがえる。ここで陳の運命が決まったのであろう。陳が殺されてから、アヒルの雛と同じ場所に捨てられたのは偶然ではないのである。

そこから彼らの闘いはとどまることなくエスカレートする。彼はセックスの時にわめき立てれば食べさせてやるという条件で、彼女を兵糧攻めにしようとする。彼女は盗み食いをする。そこで彼は家に食物を置かないようにする。すると彼女は外で仕事と引き換えの食事を求めて歩く。それには阿罔官がとどめをかけており、近所の者に林市を相手にしないように言いつけてあつた。一方夫は怒り、自分の仕事を手伝えと屠殺場に彼女を連れていく。彼女は卒倒し、そして完全に発狂する。屠殺場はこれまで自分が見た、母の死にまつわる夢そのものの光景だったからである。また、彼女が髪をふりみだし、ぶつぶつぶやく文句の中の「母は手ごめにされて古井戸に飛びこんだのでございます。私のお腹の中の舌も、母が全身びしょ濡れで、着替えもなく食もなく、腹が減って死にそうじゃと言っております」云々は、彼女をとらえていたものが何であるかを知ることができよう。彼女は少女の頃、自分を置いて性の快楽にふけり、食べ物を食べる母が許せなかつたのである。それは貧困の共同体であつた母子のつながりの裏切りであり、母の中の完全なる他者の発見であつた。彼女はその事実に耐えられなかつた。そこで叔父の手を借りて母を殺し、叔父の元にもどつたのである。彼女はその選択ゆえに大人になれなかつたし、儒教道徳への批判的視点も持てなかつた。彼女の不幸はそこから始まり、必死の生への努力にもかかわらず阿罔官に引きつけられ、自己破滅にいたつたのもその弱さゆえである。敢えていうなら、死んだ母の娘に対する復讐なのである。そして夫の母への侮辱——中国のごく一般的な罵倒

語にすぎないのだが——「てめえのおつ母を××やってやる」が殺人の引き金になるわけである。

そしておそらく、この作品の唯一の「救い」は売春婦の金花であろう。子供を産めずに売り飛ばされた寡婦、それでいながら無限の受容と寛大を持つ者。儒教社会からは見捨てられた、乞食と呼ばれる女のうちに高貴な人間性を描き出すことで、林市の生き方を測る一つの尺度が与えられていると思われるのである。

读者投票 评出《小说月报》 百花奖

本报讯 《小说月报》以读者投票的方式评选出该刊第五届“三峰杯”百花奖，共有6篇中篇小说、6篇短篇小说和2篇微型小说获奖。

获奖的中篇小说是陈源斌的《万家诉讼》、刘震云的《一地鸡毛》、曹桂林的《北京人在纽约》、刘醒龙的《凤凰琴》、方方的《桃花灿烂》、池莉的《你是一条河》，短篇小说是毕淑敏的《女人之约》、冯骥才的《炮打双打》、池莉的《热也好冷也好活着就好》、铁凝的《孕妇和牛》、谭文峰的《扶贫记事》、方方的《纸婚年》，微型小说是王奎山的《画家和他的孙女》、汤祥龙的《夫妻获奖》。

文芸報 93-12-18

《诗探索》复刊第一辑出版

由中国当代文学研究会、北京大学中国新诗研究中心、首都师范大学新诗研究所主办，诗评家谢冕、杨匡汉、吴思敬主编的诗歌理论刊物《诗探索》已在北京复刊。复刊后的《诗探索》1994年第一辑，发表了诗人艾青专门为《诗探索》撰写的文章《诗人要自信——对〈诗探索〉复刊的希望》、日本诗人秋吉久纪夫的《艾青访问记》，以及谢冕的《从诗体革命到诗学革命》、郑敏的《我们的新诗遇到了什么问题》等重要文章。此外，这一辑的《诗探索》还辟有“当代诗歌态势剖析”、“诗学研究”、“诗人研究”、“当代诗歌群落介绍”、“诗人通讯”、“诗歌理论著作评介”等专栏。（吴昂）

文学報 93-12-30

大陆第一个作家 代表团访台

本报北京讯 应台湾中国作家艺术家同盟的邀请，以朱子奇为顾问、邓友梅为团长的大陆作家代表团一行十二人，于1月11日离京赴台湾进行为期10天的友好访问。

团员有李国文、霍达（回）、常君实、放德斯尔（蒙）、雷抒雁、大母增（藏）、施勇祥（舒乙）、金坚范和范宝慈。

这是由中国作协组派的第一个访问台湾的大陆作家代表团。

文芸報 94-1-20

《钟山》推出新十批判书

见多了浮泛飘渺，大而化之以及作揖打躬式的评论文章，就会发现严格意义上的文学批评，确属凤毛麟角，稀罕得很。有感于斯，南京的《钟山》杂志特邀北京的四位青年评论家陈晓明、张颐武、戴锦华、朱伟推出了一个圆桌式批评专栏，借用了郭沫若先生的《十批判书》作栏目名称，意欲还“批判”的本意，弘扬真正的批评精神。《钟山》第六期发表了他们以“精神颓败者的狂舞”为题，对文学在九三年种种遭遇所进行的理性思考和批判。

北京晚報 94-1-13